

## 『御心に添った悲しみと喜び』 コリント人への手紙第二 7章8～16節 2016.6.5(礼拝説教より)

『悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるから。』 マタイ5:4

パウロは神を「慰めの神(ローマ 15:5、Ⅱコリント 1:3～4 等)」と呼ぶ。つまり信仰生活とは『神の慰めを受ける生活』のこと！実はその慰めは、試練の中で心碎かれ、苦しみの中で謙った者こそ受けるもの…上記のイエスの言葉通りに！

◆パウロは、厳しく叱責したコリント教会との関係が最悪になり落ち込んだが、最後は『喜びに溢れた(4,7,9,13,16節)』。それは、誤解がとけて交わりが回復したからだった。神の最大の喜びは『関係の回復』なのである！イエスは、失われた一匹の羊をやっと見つけた羊飼いが大喜びした話をして、こう語る『一人の罪人が悔改めるなら…悔改める必要のない 99 人にまさる喜びが天にある(ルカ 15:7)』と。罪人とは、神から離れた人のこと！救われるとは、神の許に帰ること！神は、私たちが悟りを開き、善行を積み、人格的に立派になることではなく、神に立ち返ることを何よりも喜ばれる！神から離れば人は悪を行い、神との交わりの中にあれば、正しく聖い生涯としてくださる！

◆パウロのもう一つの喜びは、コリント教会が、失敗や罪を「正しく悲しんだ」こと！この世には多くの悲しみがある。この教会の先代の重平牧師は、若くして事故で両足を失い、博子夫人は 15 歳で重度のリウマチを患い 50 年もの間苦しんだ。しかし悲しみ方には二種類ある…『この世的悲しみ方』と『神の御心に添った悲しみ方』！世の悲しみは、ただ後悔し、失敗をただ悔やみ、ただくよくよし、自分や他人を責め、障害や病を嘆き、悲観し、落ち込み、死に至る！しかし神の御心に添った悲しみは、神の許で泣き、神に向かって嘆き、ひたすら神に訴えて、慰めを受ける。

◆ユダとペテロは二人ともイエスに躓き、悲しみ、嘆き、イエスを裏切った。しかし悲しみ方と結末は全く違った。ユダは、ただ後悔し、ただ悲しみ、イエスの許を離れて自殺…。しかしペテロは、悲しみ、嘆き、後悔しつつもイエスの許を離れなかった。裏切りの言葉を発した時、イエスはペテロを憐れみ見つめておられた。ペテロは復活のイエスから「誰よりもわたしを愛するか？」と聞かれ、心痛めつつも全く新しい使命と喜びに生かされる生涯とされた。

★あなたは、信じ祈っても思うように行かないと神の許を離れる派？それとも悲しく苦しい時、『神様、何故こんな目に合わせるの…』とますます神に近づく派？重平師夫妻も、重度障害の苦悩を通して神の慰めを受け、神をほめたたえ、多くの人を慰める生涯とされた。十字架で命を投げ出してまで私たちを救われた神を喜びとし、悲しみの中で慰めの声を聞こう(詩篇 37:4～6)！